
じゃんけん、ぽん！

tukasa

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

じゃんけん、ぽん！

【Nコード】

N3343S

【作者名】

tukasa

【あらすじ】

高校に入学して早2週間。賑やかな放課後の中、ひとりの女の子が声をかけてきた。ほのぼの青春学園物語（仮）

0 目次《? ? ? ? ?》(前書き)

交互に喋っています。

0日目《????》

「私とジャンケンしませんか？」

「え？」

「私が勝ったら、言うことを一つ聞いてもらいます」

「僕が勝ったら？」

「諦めます」

「僕にメリットが無いような」

「では、ジャンケン、ポ」

「いやいや、ちょっと待って下さいよ」

「なに？最初はパーからの人？」

「それを言うなら、最初はグーでしょ」

「地方ルール」

「いやいや、そんなルールは無いでしょ」

「世界は広い」

「ジャンケンは日本だけでは？」

「知らない」

「・・・」

「じゃあ、気を取り直して、ジャンケ」

「いやいや、だから、何で、僕が、あなたと、今、ここで、ジャンケンしないといけないんですか」

「5W1H・・・、英語はちょっと苦手」

「いやいや、全く英語は関係無いし、むしろ、5W1Hだった？」

「さっきから、「いや」が多い。もう、20回も言ってる」

「そんなに？・・・って、そこまでは言ってますんよ」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいやいや。これでいつてるはず」

「え？自分でいったのもカウントするの」

「さっきから、「え」が多い」

「2回目ですよ・・・」

「・・・、そんなことより、ジャンケ」

「だ・か・ら、何でもジャンケンしないといけないんです」

「ひどい、そんなに怒らなくても（＾　＾）」

「使う顔文字間違ってますよ」

「（　Ｔ　Ｔ　）＼（　＾　・　＾　）　ドンマイ」

「僕の方が慰められてる？」

「失敗は誰にでもある。私は気にしないよ？」

「いや、もっと気にしてください」

「・・・。」ちっ、

「「」に入ってもなくても聞こえましたよ。今、舌打ちしましたね」

「心を読まれた！あなたはサトラレ？」

「しっかり耳で聞きましたよ。それに心を読む方はサトリです」

「・・・」

「あの、そろそろ帰ってもいいですか？」

「しょうがありません。そこまでして聞きたいのなら、本当のことを話します。」

「それじゃ、さようなら」

「待って下さい。ぜひ、聞いてください」

「わかりました。では、何でもジャンケンしないといけないんですか？」

「部かちゅ・・・」

「・・・」

「・・・部活動誘です（キリ）」

「そんなキメ顔したって、最初に噛んでますから」

「かみまみま」

「ここをつつこんだら負けなような気がするのでスルーしますが、薄々、部活動誘なのはわかっていました」

「さすがは、小学生探偵ね」

「いや、そんな、体は子供、頭脳は大人な小学生じゃありませんから。それにここは高校で」

「そう、残念」

「周りにこんなに部活動誘してる人達がいるのだから、普通に勧誘とわかりますよ。」

「・・・」

「・・・？、急に黙ってどうしたんですか」

「・・・、喋り疲れた・・・」

「そうですか。なんかさつきから周りの人達から、かわいそうな子を見るよな目で見られているんですけど」

「大丈夫！私はあなたを見た目だけで判断しないわ」

「僕も先輩が可愛いからって、いい人だとは思いませんから」

「そんな可愛いなんて・・・。まさか、勧誘してたら後輩から告白されるなんて（ポッ）」

「いやいや」

「ゴメンなさい」

「告白していないのに、断られた？」

「そういう訳で、ジャンケンに勝ったら、うちの部に入部してください」

「どういう訳かはわかりませんが、ジャンケンしないと帰れないのはわかりました」

「何とか説得がうまくいきました」

「上手くはいっていません」

「では、ジャンケン、ポン」

「チヨキ」

「グー」

「うっ、負けた」

「お一人様ご案内」

「ちなみに、何部なんですか？ジャンケンにこだわっていましたが」

「麻雀研究同好会。通称「じゃんけん」」

「・・・部じゃないんだ」

「今日からは、麻雀研究「部」ですけどね」

一日目〈部室〉僕×先輩

今日の授業もようやく終り放課後になったので、昨日とある理由で入部することになった部活へ向かうことにした。

先輩「おはよう」

僕「・・・今、放課後ですよ？」

先輩「うちの部の挨拶は、創立以来いつでも「おはよう」」

僕「昨日、ようやく「部」に昇格したんですね？」

先輩「おはよう」

僕「・・・おはようございます」

先輩「では、部活をはじめます」

僕「あの、まだ僕たち二人しかいませんけど」

先輩「問題ない」

僕「他の人はどうしたんですか？」

先輩「みんな用事で今日も来ない」

僕「よく、同好会から「部」になりましたね」

先輩「部員の数さえいれば、問題ない」

僕「問題あるような・・・」

先輩「部活中は私語禁止」

僕「・・・ちなみに、今日は何をするんですか？」

先輩「部屋の掃除」

僕「確かに掃除のしがいのある部屋ですが、何で部活初日で部室の掃除なんですか」

先輩「今まで使えなかったから」

僕「そういえば、この部室使えるにも今日からですもんね」

先輩「先月、ここで鍋をやった時にボヤ騒ぎがあつて、昨日までは使用禁止になつてた」

僕「え！？去年からこの部屋使ってたんですか」

先輩「ずっと前からここはうちの部が使ってる」

僕「部室がきたないのは先輩たちが掃除しなかったからですな」

先輩「あの頃は楽しかった」

僕「まだ、1ヶ月しかたつてませんよ」

先輩「もう、あの頃には戻れない」

僕「いや、すぐに戻れますよ」

――小一時間経過――

僕「さて、ようやく部屋が片付いてきましたね」

先輩「さすが私、やれば出来る子（キリ）」

僕「先輩はほとんど見てるだけでしたが」

先輩「私もちゃんと片付けした」

僕「ええ、雑誌を読みながら本棚にしまっていましたね。読まずに片付けていたらもっと早く終わっていましたが」

先輩「時間は有効に使わないとダメ」

僕「有効に掃除してください」

先輩「意見の相違ね。しょうがないジャンケンしましょう」

僕「何でここで、ジャンケン何ですか」

先輩「部内の争いごとは、ジャンケンで決める決まり」

僕「ウチ麻雀研究部ですよ。そういうときは、麻雀じゃないんですか？」

先輩「あんなのは、時間がかかるだけで使えない」

僕「ウチの部の存在理由が揺らぎますね」

先輩「そういう訳で、私が掃除をするかしないかをジャンケンで決めましょう」

僕「いつの間に議題が掃除をするかしないかになったんですか」

先輩「ジャンケン」

僕「こっちの意見は完全スルーですか」

先輩「ポン」

僕「チョキ」

先輩「パー」

僕「・・・」

先輩「？」

僕「それじゃあ、しっかり掃除してくださいね」

先輩「（――；）」

二日目〈部室〉僕×部長

「おはー」

「・・・おはようございます?」

「ん?どうしたの」

「あの、どちらさまですか?」

「あたし?あたしは麻雀研究部の部長」

「え!部員募集していた先輩が部長だと思ってました」

「麻雀研究部部长・・・通称ジャンケン部長(、´)(´)」

「で、部長は部室でなにしてるんですか?」

「いきなりスルー?せっかく昨日寝ないで考えたのに(――;)」

「あー、だから部室に布団敷いて寝てるんですね」

「ピンポン正解!一緒に寝る?」

「遠慮します」

「即答Σ(´。´)(´)(´)」

「今日も他の方は休みですかね」

「また、またスルー？一日目にして部長としての威厳がorz」

「じゃあ、まず布団から出てから、その威厳について話しませんか？」

「そうね、まずはお互い同じ目線にたって話さないかね」

「それでなぜ布団に座っているんですか？」

「さあさあ、遠慮せず座りたまえ」

「遠慮します」

「またしても即答Σ（。」「ノ」

「何だかりアクションがちょっとウザいですね」

「しかも、毒舌？」

「いや、冗談ですよ」

「ほんと？ゞ（@ー@）ノ」

「はい、本当はかなりウザいですね」

「うぎゃ？」

「そんなことより」

「そんなこと・・・orz」

「さっきから気になってるんですが」

「なに？」

「部長のネクタイの色って一年と同じですけど、もしかして・・・」

「あ、やっと気づいた？」 「」

「四年生なんですね」

「ちがう（T ^ T）」

「え？それじゃ・・・」

「君と同じ一年だよ！」

「え！？」

「しかも、君と同じクラスだよ」

「え？今日いました？」

「今日は、朝登校したんだけど、ここで寝ちゃってた（」 「」

「今日の欠席者っていったら・・・！！あのバカか！？」

「初対面の同級生からいきなりバカ呼ばわりされたΣ（・□・・:」（」

「という事は、部長というのは嘘か？」

「いや、本当に部長だよ」

⌈
•
•
•
⌋

「いや、おとといジャンケンで勝って部長になったんだYO」

「まさか部長までジャンケンで決めるとは」

「まあ、そういう訳でこれからよろしくね（、、、）」

「断る」

「またしても、即答拒否。 why、何故、（Di i）ノ」

「学校内で女装する奴と仲良くできるか」

三日目〈部室〉 僕×姉妹

「ごきげんよう」

「あつ、おはようございます」

「あら、あなた侵入部員？」

「ええ、『新入部員』です」

「じゃあ、あなたがあの・・・」

「あの？」

「変態さんですか」

「違います。変態は部長の方です」

「いえ、部長さんには、もうお会いしましたよ？」

「じゃあ、僕と部長以外に新入部員がいたんですね」

「今年の新入部員は二人らしいですよ？」

「・・・」

「なんでも、勧誘時に辱められたと聞きましたが」

「僕の方が辱められてたような」

「そうでしたか」

「そうなんです」

「話に聞く、『M』という方なんですネ」

「違います」

「そんな謙遜なさらなくても」

「これっぽっちも謙遜していませんから」

「まあ、誰でも性癖は隠しておきたいものですからね」

「・・・」

「若いっていいわね」

「なの、そろそろ、お隣の方をご紹介いただけませんか」

「あら、そうでした。この子は私の妹です」

「ああ、どつりで似てる訳ですね」

「ええ、よく言われますわ」

「ちなみに、どうして先ほどから妹さんは黙っておられるんですか？」

「あら、そうでした。変態さんとは口を聞いてはいけないと言い聞かせているものですから」

「もう、誤解はとけましたよね？」

「ええ、もちろん。危険はない変態さんだとわかっていますよ」

「どうやら、まだ説明が必要そうですね」

「まあ、そんな些細なこと気になさらずに」

「非常に重要なことです」

「妹はもとと人見知りがひどくて、初対面の変態さんとはあまり話せませんので」

「そうでしたか。なら、僕となら大丈夫ですね」

「それよりも私ちょっと席を外さなければなりませんので、少しの間、妹のことよろしくお願いしますね」

「ええ、僕でよければ」

「では、失礼しますね」

「さて、待つてる間なにをするかな」

「さっきからうるさいぞ、カス」

「ん？いま何か聞こえたような」

「「せつかくのお姉様との有意義な時間を台無しにしおって」

「ああ、妹さんか。改めて・・・」

「「軽々しく話しかけるな」

「なんだか、言葉使いがトゲトゲしいような」

「「お前のようなカスと交わす言葉は無い」

「・・・」

「「・・・」

「・・・」

「「・・・」

「・・・。あの、」

「「・・・」

「はあ、この部活にはまともな人はいないのか？」

「「貴様、お姉様を侮辱するとは、校内を引きずり回すぞ」

「「・・・」

「これ以上喋ると息の根を止めるぞ」

「・・・」

「全く、下等なクズほどよく喋る。クズはクズらしく、部屋の角で転がっていればいいものを。よりもよってお姉様と会話するのは。全く身の程をわきまえよ。」

「なんだかんだで、妹さんもよく喋りますね」

「もしもし。ああ、私だ。仕事を頼みたいのだが」

「あの、どちらに電話されているのですか？」

「ただの掃除屋だ」

「へ」

「なに、社会のクズを掃除してもらおうと思ってな」

「調子に乗って、すみませんでした」

「いまさら謝って・・・あ、お姉様お帰りなさいませ」

「あ、用事はお済みにナラレタンスカ」

「ええ、それでは、私たちお先に失礼しますね」「ええ、お姉様帰りますしょう」

「オツカレサマデシタ」

「それでは、ご機嫌よう」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3343s/>

じゃんけん、ぽん！

2011年11月17日00時53分発行